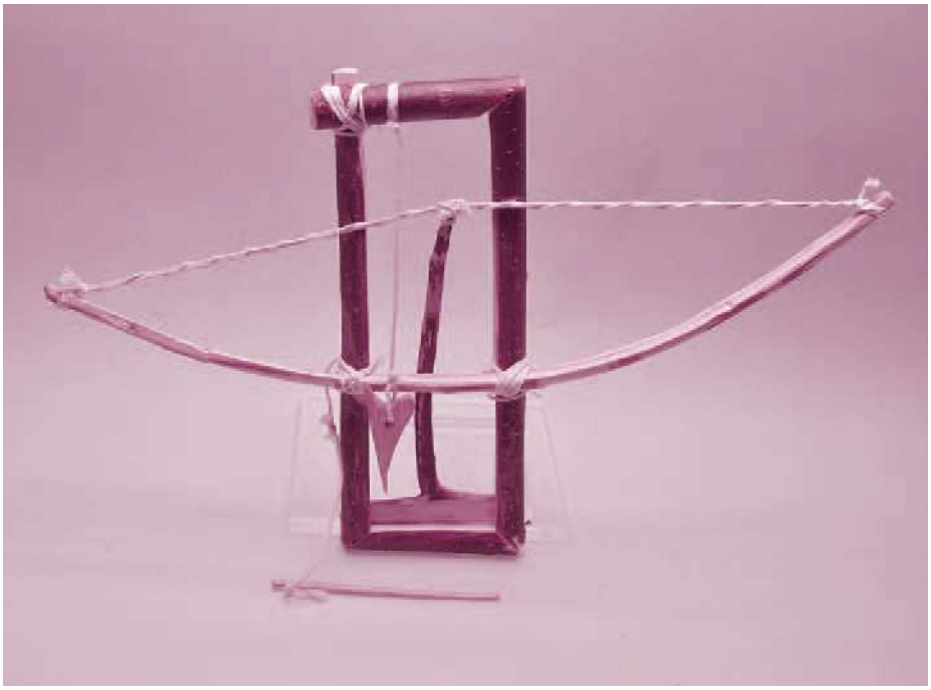
ISSN 0917－4729

北方民族博物館だより

No. 106



D17.2.1　自動弓式ワナ模型　エベン　ロシア／マガダン市　2005年収集
25.0 x 45.0 x 3.5cm　Boris Alekseevich Frolov製作

北方世界には様々なワナが存在します。その中でも本資料のような弓の反発力を用い、獣を圧殺するワナは北海道、サハリン、シベリア全域と、広い地域で利用されてきました。こうしたワナは、かつては交易品としての毛皮を入手するために用いられました。動物を挟みこんで捕らえるという構造になっており、クロテンやイタチ、キツネなど小型獣、中型獣の毛皮を傷めないで捕獲するために用いられました。

目次　Contents

1　表紙　自動弓式ワナ模型
2－3　第32回特別展「ユーラシア北方のウマ牧畜民－カザフ　モンゴル　サハ」
／館長講座「北の人と言葉」
4　講座「北海道博物館紀行　旭川市博物館」
／ロビー展「カナダ・イヌイトの版画展」
5　講座「サハリン（樺太）の言葉を書く」
／講習会「白樺樹皮で作るバスケット」
6　INFORMATION

北海道立北方民族博物館
Hokkaido Museum of Northern Peoples

第32回特別展

ユーラシア北方のウマ牧畜民
ーカザフ　モンゴル　サハ

2017. 7. 15−10.15

ウマは人にとって、もっとも重要な動物のひとつといえるのではないでしょうか。ウマを飼いならし、その背に乗ることで、人はそれまでにないスピードで長い距離を移動できるようになり、行動範囲を広げてきました。

ユーラシア大陸の草原地帯（ステップ）では、この「ウマに乗る」という文化を背景に、家畜を飼いながら移動生活を送る遊牧という生活様式が広く営まれ、ウマの乳や肉を利用する文化が発達してきました。本特別展では、カザフ、モンゴル、サハといったユーラシア北方地域の牧畜民を対象に、ウマとの関係を紹介しました。

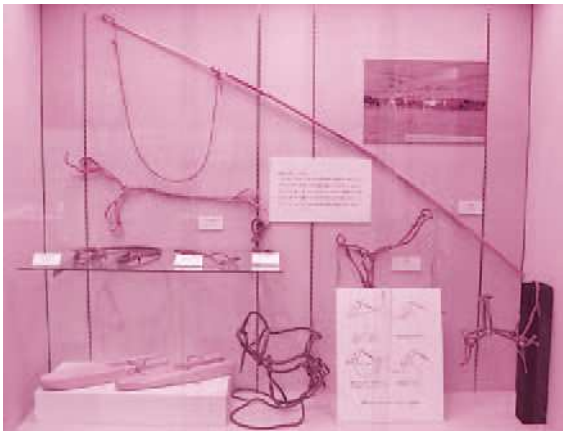
展示は「牧畜民とウマ」、そして「現代のウマ牧畜民」の二部構成としました。

牧畜民とウマ

このコーナーは、さらに「操る」、「乗る」、「食べる・飲む」の３つの部分から構成しました。

「操る」 ウマは、一般に昼夜を通して放牧されるため、大半の時間、自由に草原を動き回っています。そうしたウマを人に馴らしたり、捕まえたりしなければならない際に役立つのがウマを「操る」ための道具です。このコーナーでは、面繋（おもがい）や足かせなど、ウマを捕獲したり、その動きを制限したりするための道具を中心に展示しました。

銜（はみ）はウマの前歯（門歯）と奥歯（臼歯）の間の隙間に装着する器具で、手綱とつないでウマを乗り手の思いどおりにコントロールするために使われる、もっとも基本的な馬具です。騎乗が開始された際にすでに利用されていたと考えられますが、数千年前から基本的なしくみは変わらず、現代のウマ牧畜民にも使われています。



「操る」のコーナー

「乗る」 家畜としてのウマの大きな特長は、騎乗できるということです。騎乗により、人はそれまで持っていなかった移動能力を手に入れました。ここでは、鞍（くら）や鐙（あぶみ）など「騎乗」をおこなうために創り出された道具を展示しました。

銜に比べると、鞍や鐙の使用はかなり遅れて始まります。騎乗の初期には、ウマの背に敷物を置き、その上に乗っていたようですが、やがて敷物が木や骨を素材としたよりしっかりしたものに代わり、今日の鞍の原型が形成されたと考えられます。鐙は、鞍に取り付け、騎乗する人が足を置くための道具です。鐙がこうした機能を果たすのは、固い枠や腹帯付きの鞍がしっかりとウマの背に固定されるようになって以降と考えられます。

「乗る」のコーナー：モンゴルとカザフの騎乗用鞍
（左よりモンゴル、モンゴル、カザフ）

「食べる・飲む」 かつて野生のウマは狩猟対象とされ、家畜化された当初もウマはおもに肉用に飼育されていたと考えられています。そして現在も、多くのウマ牧畜民の間で馬肉が一般的に食べられています。モンゴルでは、馬肉はあまり積極的には利用しない、あるいは食べないという人もいますが、他の家畜の肉と同様に食用にされることも多いようです。一方カザフやサハは、特に馬肉をおいしいもの、ごちそうとして好んで食べています。

ウマの乳の利用は、5000年以上前までさかのぼることができます。ウマの乳には乳糖分が多く含まれ、脂肪やタンパク質が少ないため、バターやチーズの材料には適さず、ほとんど馬乳酒だけに加工されています。馬乳酒は、ウマの乳を材料とするアルコール度数２％程度の飲物で、多くのウマ牧畜民によって作られ、飲用されてきました。見た目は乳とあまり変わりませんが、わずかに発泡性があり、かなり酸味が強い飲み物です。

このコーナーでは、肉を調理するためのナイフやまな板、盛り付けるための食器、また馬乳酒を製造したり、飲用したりするための道具類を展示しました。

現代のウマ牧畜民

このコーナーでは、本特別展で取り上げた３民族を対象に、ウマとの関わりという観点から文化の一端を紹介しました。

カザフ　カザフスタンを中心に、中国・新疆（しんきょう）ウイグル自治区、ロシア連邦、モンゴル国西部などに暮らすテュルク系の民族です。伝統的に草原地域での牧畜や狩猟を生業とし、遊牧生活を送ってきました。今日まで鷹狩の文化を保持していることでも知られています。ここでは、カザフの民族衣装や鷹狩に関する資料を展示しました。

モンゴル　モンゴル国、中国・内モンゴル自治区とその周辺地域を中心に暮らす民族で、ウシ、ウマ、ラクダ、ヒツジ、ヤギの牧畜を伝統的な生業とし、遊牧生活を営んできました。ここでは移動式住居「ゲル」を設置し、そのなかに生活用具とともにウマの頭を象った弦楽器「馬頭琴」などを展示しました。

サハ　ロシア連邦サハ共和国を中心に暮らすテュルク系の民族で、「ヤクート」とも呼ばれます。10～13世紀にかけてバイカル湖周辺から北上した人びとが、周囲の集団を吸収しながら形成されたと考えられ、ウマ、ウシの牧畜を伝統的な生業としてきました。ここではウマの毛が使われた白樺樹皮製容器などを展示しました。

展示室では、ウマ牧畜文化を紹介する写真や映像なども展示しました。また、触れることができるウマの毛皮や騎乗できる鞍などの体験コーナー、ウマや牧畜文化に関連する図書コーナーを設けました。

なお、本特別展の開催にあたり、国立民族学博物館、北海道大学総合博物館、NPO法人北方アジア文化交流センターしゃがぁ、廣田千恵子氏、池田カナ子氏より協力いただきました。記して感謝申し上げます。

（学芸グループ　中田　篤）

「モンゴル」のコーナー：移動式住居「ゲル」

館長講座

北の人と言葉

2017. 6. 11

講師　津曲 敏郎　（当館館長）

津曲館長

就任後初の館長講座では、津曲館長が40年に及ぶ自身の研究生活のなかから印象に残ったエピソードを紹介しました。ツングースと総称される民族のうち、ウイルタ、ナーナイ、ウデヘの暮らしや言葉、また調査で出会った魅力ある人物についてのお話です。内容を紹介します。

戦後、サハリンから北海道に引き揚げてきたウイルタに聞き取り調査をしたとき、佐藤チヨ（ウイルタ名：ナプカ）さんから、「北斗七星は金持ちには８つに見える」という話を聞きました。はじめ館長はこの話の意味がわかりませんでした。しかし、アルセーニエフ著『デルスー・ウザーラ』を読み、その意味がわかったといいます。「狩猟で生活資金をかせいでいる彼にとって、視力のおとろえは破滅にもひとしいことだった」の記述のとおり、狩猟民にとって目は命です。優れた視力を持つ狩猟者はたくさんの獲物を捕り、生活資金を多くかせぐことができます。北斗七星のひしゃくの柄にあたる３つの星のうち、真ん中の星は２つの星が寄り添って見える二重星ですが、目の良い狩猟者にはそれがはっきり分かれて見えるという意味だったのです。

ナーナイ語の調査では、ナーナイ詩人アンドレイ・パッサール氏との出会いがありました。パッサール氏によるナーナイ語の詩「遅れた亀」のなかで、ナーナイ語の文字化が遅れた理由が語られます。多くの北方民族にとって文字は必要不可欠なものではなく、むしろ語りという手段に自信をもっていたことがうかがえるといいます。

ウデヘ語の調査では、ロシア沿海州ビキン川中流のクラスヌィ・ヤール村に入りました。ここで出会ったウデヘのアレクサンドル・カンチュガ氏は自伝と民族史をウデヘ語・ロシア語対訳で執筆しています。館長はこれを日本語に訳し、『ビキン川のほとりで：沿海州ウデヘ人の少年時代』を2001年に刊行しました（増補改訳版2014年）。

館長が調査で収集した言語記録は整理・保存され、他の博物館や研究機関とも連携しながら、当館の普及活動や展示に役立てられることが期待されます。

（学芸グループ　種石　悠）

講座

北海道博物館紀行「旭川市博物館」

2017. 7. 30

講師　瀬川　拓郎氏（旭川市博物館館長）

北海道博物館紀行は北海道内のユニークな活動をしている博物館を紹介する講座です。今回は、旭川市博物館の瀬川拓郎館長をお招きし、平成５年に開館し、20年にリニューアルした同館の常設展示についてお話しいただきました。

瀬川拓郎氏

旭川市には、嵐山という小山があります。ここは昔から上川アイヌ（旭川市は、北海道の上川という区域に入ります）の人たちが、動物や、役割を終えた道具などを持って行き神の世界に送り返す場所でした。昭和40年代に嵐山の発掘調査をした時に赤ちゃんのベッドや牛乳瓶が見つかりました。旭川には明治24年に屯田兵が入ってきますが、もちろんそれ以前からアイヌの人たちが住んでおり、その後もずっと固有の文化を守ってきたのです。このことを象徴的に見ていただくために常設展示入口には、赤ちゃんをあやすメリー飾りとクマの頭骨を展示しました。

また、最近、博物館の展示では人形を使わないところも増えていますが、あえて上川アイヌの女性がサケを干しているジオラマを作りました。旭川の縄文時代の遺跡からは、サケの骨は出土しません。遺跡も川辺からは離れたところにあります。ところがアイヌ文化期の遺跡からは、サケの骨が出土しますし、遺跡も川のすぐ近くです。

海から遡上（そじょう）したサケは、旭川に着くまでにはぼろぼろになります。それで縄文時代の人々はサケを利用しませんでした。では上川アイヌはサケをどうしていたのかというと、本州に移出する交易品（干し鮭）に加工していたのです。例えばクマ皮の方が交易品としての交換の率はよいのですが、サケは老姿でも採ることができ、サケ漁は大勢が従事できる作業でした。

またサケの遡上しない川沿いに、アイヌの集落がみられる例もあります。こうした村ではサケ漁をしていませんでした。このように、アイヌ女性がサケを干す姿の背景を含めて常設展示室で見ていただこうと考えたそうです。

この他にも、展示を１コーナー作るにも、裏づけとなる膨大な研究があることを感じさせるお話をして下さり、講座参加者は改めて旭川市博物館に関心を持った様子でした。

（学芸グループ　笹倉　いる美）

ロビー展

カナダ・イヌイトの版画展

2017. 6. 3-7. 2

カナダを訪れると美術館やギャラリー、土産物屋など様々な場所で先住民が制作した版画を目にすることがあります。カナダでは多数の先住民が自らの文化などを題材に版画制作を行っていますが、特に著名なものが極北に暮すイヌイトたちによる版画です。今回のロビー展では当館所蔵の版画を通じてイヌイトの文化と歴史を紹介しました。

また本展に先立ち４月22日から５月14日にかけて、北見市の北網圏北見文化センターにおいて移動展「カナダ・イヌイトの版画たち―北海道立北方民族博物館所蔵展―」を開催しました。この移動展では当館所蔵のほぼ全数にあたる85点の版画を紹介し多数の来館者がありました。

イヌイトの版画は、その多くがイヌイトの伝統世界や世界観を描いたものですが、制作されたコミュニティや制作時期、アーティストによって技法や題材が異なり多様性があります。本展では作品が制作されたコミュニティごとに展示することで、多様なイヌイトの世界を示しました。

もっとも、版画制作が歴史時代以前から続く「伝統」であったわけではありません。イヌイトの版画制作は1957年から始まりました。イヌイトによる版画の誕生は（そして版画制作に先行する、「現代」の彫刻制作は）、当時、ケープ・ドーセットに滞在していたジェームズ・ヒューストンという芸術家による「アート制作を通じてイヌイトの経済的困窮を解決する」というアイディアに端を発しています。イヌイトの版画制作は、ヒューストンとケープ・ドーセットのイヌイトたちによる試行錯誤と共同作業によって誕生したものです。

会場の様子

ヒューストンは1958-59年にかけて来日し、日本版画界の重鎮、平塚運一（うんいち）のもとで「錦絵」（多色刷浮世絵版画）の技法を学びます。ヒューストンが錦絵の技法を伝えたことによって、イヌイトの版画には和紙の利用、落款（制作者印）、絵師、彫師、刷師の分業による制作工程などに日本の影響を見ることができます。

鑑賞者の中には版画に描かれた豊かなイメージを楽しんだだけではなく、遠い極北の地に、日本の浮世絵の伝統が活（い）かされていることに驚いた方も多かったようです。

（学芸グループ　野口　泰弥）

講座

サハリン（樺太）の言葉を書く

2017. 6. 3

講師　山田　祥子（当館学芸員）

サハリン（樺太）先住民の言語として、ニブフ語、アイヌ語、ウイルタ語が挙げられます。かつてこの島の日常会話は主としてこれらの言語によって行われましたが、文字をつかって書き表わす習慣（書き言葉）はありませんでした。本講座では、サハリン先住民の言語が「書かれる」ようになった現在までの経緯を紹介しました。

そもそも文字のない言語を書くには、どのような方法があるでしょうか。話し言葉を聞いてとにかく書き留めようという場合は、たとえばカタカナのように、他言語の文字をつかうという方法があります。より正確に、その言語の全体を書き表わそうという場合には、音韻や語彙（ごい）・文法の整理など言語学的な研究をして、そのうえで文字や記号、表記の方針を定めていきます。

サハリン先住民の言語は19世紀以降、探検家や研究者、ネイティヴなどさまざまな人物によって記録・記述されてきました。つかう文字や表記の方針は人によって異なりましたが、のちに書き方を統一する動きがそれぞれの言語で起こってきます。そうした動きは、20世紀以降、ロシア語や日本語といった大言語の普及にともない先住民言語が衰退したという事実を背景として、先住民言語の保存や教育を目指したものでした。

ニブフ語の場合、1920～30年代、教育用にラテン文字（ローマ字）による書き方が考案されましたが定着せず、のちにキリル文字（ロシア字）による書き方が用いられるようになりました。20世紀後半から、キリル文字を基本にしたニブフ語の書き言葉で教材や読み物が刊行されるようになっています。アイヌ語（樺太アイヌ語）は、主に戦後の北海道で調査・研究が進められ、ラテン文字を基本とした音韻表記でテキストや文法書が刊行されてきました。近年では、一般向けの参考書も出ています。ウイルタ語では、1990年代にキリル文字を基本にした書き言葉が定まり、2008年に教科書ができました。以来、ウイルタ語の読み物が次々と刊行されています。

サハリン先住民言語の出版物

今日、サハリン先住民の言語が日常会話に用いられることはありません。しかし、どの言語でも「書かれた」物がさまざま出版されており、その言語を読んだり学習したりすることができます。このことは、これまで先住民言語を伝え残そうとしてきた人びとの取り組みが世代をこえて受け継がれた成果であり、未来に伝えていきたい財産だと思います。

（学芸グループ　山田　祥子）

講習会

白樺樹皮で作るバスケット

2017.6.17

講師　山辺　朋子氏（白樺細工作家）

昨年はじめて企画して大変好評だったことから、今年も白樺細工作家の山辺朋子さんをお招きし、白樺樹皮で作るバスケットの講習会を開催しました。

山辺朋子氏

山辺さんはロシアの東シベリアの豊富な白樺林のなかで白樺樹皮細工を学ばれました。白樺樹皮の採集は、まず幹に縦に切りこみを入れます。深すぎると木の本体（コルク層）まで傷つけてしまうので努めて浅くします。白樺にも個性があり、良い時期だからといって全てが剥がしやすいわけではないということですが、うまくタイミングがあった白樺は切りこみを入れたところが浮きあがってきて剥がしやすいそうです。ちなみに網走は、講習会の頃が白樺樹皮を剥ぐのによい季節です。

白樺の樹皮を剥いだ時、外側は白く内側は黄茶系の色をしています。剥がした樹皮は、白い部分が中側になるように巻いておきます。これを反対にすると、巻きがきつくなって戻すのが大変になるそうです。

今回も昨年と同じく、１cm幅の12本の白樺樹皮を編むタイプのバスケットを作りました。あらかじめカッターで白樺樹皮を切り、テープの形にするところまで準備しておきました。このうち６本を講師の山辺さんが厚み調整をして下さいました。残り６本を受講者が調整しました。

白樺樹皮のバスケット作りは、白樺樹皮の準備が8割、編むのが２割だそうで、この作業が非常に重要になります。樹皮は層になっているので、さらに３枚くらいに剥いで編みやすい厚さにしてゆきますが、節があったり、樹皮によってはなかなか剥げないものもあり、参加者は講師が説明した白樺樹皮の個性を感じておられたようです。

完成した作品

昨年の講習会も踏まえてさらにわかりやすく指導していただき、全員が形にすることができました。

（学芸グループ　笹倉　いる美）

第32回北方民族文化シンポジウム 網走「環北太平洋地域の伝統と文化2 アムール下流域・沿海地方」

北太平洋を取り囲む地域は、自然環境や生物資源だけではなく、文化的にも類似性や共通性が指摘されてきました。本シンポジウムでは、環太平洋沿岸の地域ごとに先住民文化の特徴や変遷、現状を総合的・学際的に比較・検討します。今回は、対象地域としてアムール下流域・沿海地方を取り上げます。

■日程：平成29年10月７日(土)・８日(日) 各日9:00～16:00　【参加無料】※レセプションは会費5000円

■会場：オホーツク・文化交流センター(エコーセンター2000) 大会議室[網走市北2条西3丁目／TEL.0152-43-3704]

■発表者　A.ペヴノフ（ロシア科学アカデミー・言語学研究所［ロシア］/主任研究員)、A.サマル（ロシア科学アカデミー極東支部・歴史・考古・民族学研究所［ロシア］/研究員)、小嶋芳孝（金沢学院大学文学部/教授)、井黒忍（大谷大学文学部/准教授)、臼杵勲（札幌学院大学人文学部/教授)、白尚燁（室蘭工業大学国際国流センター/特定専門職員)、中村和之（函館工業高等専門学校/教授)、佐々木史郎（国立アイヌ民族博物館設立準備室／主幹）

■コメンテーター：荻原眞子（千葉大学/名誉教授）

■運営委員：田口洋美（東北芸術工科大学芸術学部/教授）ほか

◇関連事業：草原の音楽～馬頭琴と喉歌【出演】嵯峨治彦（馬頭琴・喉歌)、嵯峨孝子（ギター・朗読）

■日程：平成29年９月21日(木) 18:00 開場、18:30 開演

■会場：オホーツク・文化交流センター（エコーセンター2000）エコーホール

クマ狩猟用ワナ模型／コリヤーク

ロビー展　北のメカニクス　狩猟ワナの仕組み

■会期：10月28日(土)～11月26日(日)

■会場：北方民族博物館ロビー　■観覧：無料

北方地域では様々なワナが利用されてきました。本ロビー展では当館所蔵資料を用いて北方民族が利用してきたワナの仕組みに注目し、動物を捕らえるメカニズムや北方民族と毛皮獣の歴史を紹介します。

INFORMATION

行事報告

◆６月10日(土) はくぶつかんクラブ「ビーズ織り」(講師：太田由美解説員) を開催しました。

完成した作品を手にする参加者

◆６月25日（日）ユハンヌス・夏至祭りとして夏至祭り茶会（協力：茶道裏千家淡交会網走青年部)、フラダンス（実演：レイアロハフラ網走)、ミニコンサート（演奏：mix jam)、モルック大会、試食会（じゃがバター、シカ肉ソーセージスープ、北欧風クレープ）などを実施しました。

夏至祭り茶会

◆７月17日(月・祝) バイダルカ試乗体験を開催しました。

バイダルカに試乗する参加者

◆７月22日(土) はくぶつかんクラブ「石器のナイフ作り」(講師：種石悠学芸員) を開催しました。

◆７月23日(日)、８月20日(日) 解説会「特別展展示解説会」(講師：中田篤主任学芸員) を開催しました。

◆８月５日(土) はくぶつかんクラブ「フェルトで作るゲル型小物入れ」(講師：石原生久代解説員) を開催しました。

完成した小物入れを持つ参加者

調査報告

◆６月21日(水)～6月28日(水) 能取岬西岸遺跡（網走市）で発掘調査を行いました。

◆７月24日(月)～８月９日(水) 中田篤主任学芸員がサハ共和国チュラプチャ郡で現地調査を行いました。

◆８月２日(水)～８月25日(金) 野口泰弥学芸員がカナダ・ユーコン準州で現地調査を行いました。

北方民族博物館だより
No. 106

平成29(2017)年９月22日発行
編集・発行　北海道立北方民族博物館
〒093-0042 北海道網走市字潮見309-1
Tel 0152-45-3888　Fax 0152-45-3889
e-mail：tonakai@hoppohm.org
http：//hoppohm.org
指定管理者
一般財団法人北方文化振興協会